



ポズナンに見るポーランド

もぎ のりえ
茂木 規江

アダム・ミツキエヴィチ大学・講師

ポズナン市はポーランドの西部に位置する、ヴィエルコポルスカ(大ポーランド)県の中心都市にあたります。そして10世紀にポーランドで始めてカトリックの司教座がおかれたところとしても知られています。またここは、ドイツの首都ベルリンとポーランドの首都ワルシャワとの中間地点でもあります。地理的にドイツに近いだけでなく、過去何度かドイツ領となっていたということもあり、ドイツとの結びつきも強いところです。人口約60万人と国内では5番目に大きい都市ですが、市内在住の日本人は47名(在留届出数)程度と、ポーランド国内に住む日本人の約5パーセントにしかすぎません。

この町は駅前に国際見本市会場があるところとしても知られており、毎月何かの見本市が開催されています。その中でも年一回開かれる総合国際見本市が一番大きなもので、この時期には宿泊施設の確保や、市内の交通等にも影響がでるほどです。また市内中心部には2003年に地元出身でポーランド一の富豪が建てた百貨店があり、週末は買い物客でにぎわっています。ここでは毎週末及び祝日そして夏休みなどには様々な催し物を無料で行っており、地域住民に受け入れられようとしています。昨年8月アメリカで行なわれた中規模百貨店評価(外観等を含めた多角的評価)で世界一になり、ポズナン市民の自慢の種にもなってい

ます。その他この町で目を引くことは乱立する外国資本の大型スーパーです。クリスマスや復活祭等カトリックの重要な祝日以外は無休で営業している大手スーパーは、中小規模店を脅かす存在である反面、地元住民に雇用機会を与えるという形での地元還元をしているとも受け取られています。

一見「ビジネスの町」との印象を受けそうなポズナン市ですが、市内には国立総合大学をはじめ、医科大学、音楽大学、経済大学、学芸大学、工科大学、その他に多数の私立大学がある「大学の町」とも言えます。学生はポーランド全土から集まってくるため、学年度と休み期間では市の人口に増減がでるほどです。大学があり学生が集まってくることで、空き部屋やアパートを貸し、それを生計の一部にしている市民も数多いです。

ポーランドの国立大学は一般に授業料無料と言うだけではなく、成績優秀者には奨学金も与えています。ただし週末や夜間に開講されている場合はこの限りではありません。授業料無料で奨学金までいただける「うらやましい制度」は税金でまかなわれています。この制度の利点は、入学試験に合格すれば(貧富の差無く)誰でも勉強でき、親にあまり負担をかけなくても大学生活を送ることが可能だということでしょう。このためか、在学中に2つ目3つ目の修士課程を始める学生がいる



のには驚かされます。そして実際に修士号を2つも3つも持っている人たちが少なくありません。さらに、ヨーロッパ大陸という陸続きの地の利を活かしてか、在学中に気軽に数ヶ月から1年の留学に行く学生も数多いです。EU圏内の学生や研究者用に設けられた「エラスモス」という奨学制度があることもこれに拍車をかけています。

さて、この「うらやましい制度」の難点ですが、税金に頼っている国立大学は慢性的な貧窮状態で、講師の給与も低く抑えられています。大学内の設備等が古いばかりではなく、改善もしにくく、必要最低限と考えられる設備を新しく整えるのも大変な時間と忍耐が必要です。このため、若く有能な研究者が外国へ行ってしまい帰ってこないとか、低賃金のために家庭を維持できないので大学を去り一般企業に就職するという話も多々あります。よく日本人の同僚と「僅かな額でかまわないから学生が授業料を納めるようにすれば、この状態は良くなるのではないか」と話し合うのですが、支払わなければならない側にとって、こういったことは論外のようなのです。

ところで、ポズナンの大学生は三年・四年在学中に学業の合間を縫って、アルバイト又はパートとして働き出すことが多いです。これは、以前の外国語ができ大卒の肩書きがあれば仕事はすぐに見つかった時期から、仕事が見つけにくい時期に

なったことが影響しているようです。卒業生からは「思ったような仕事がない」という声が聞かれるようになりました。今でも家族との結びつきの強いポーランド人にとって、大学卒業後には帰省し就職するのが理想です。しかし、現実には理想から遠く、地元では仕事が無いので仕方なく、学生時代に住み慣れた土地で就職したり、実家近くの大きな都市に移り仕事を探しています。

こういった状況の中で、働く場所は国外へも広がっています。特にポーランドがEUに加盟してからは、EU加盟国へ出稼ぎに行くポーランド人も後を絶たしません。例えば、フランスではポーランド人の「水道屋さん」を宣伝するためにハンサムなモデルを使い人気が出たことや、イギリスでは毎週仕事を求めたポーランド人が長距離バスでやってきて、その中でバスの運転手はなり手がいないので重宝されていることなどは、ニュースでもたびたび取り上げられ、記憶に新しいところです。まだ若く将来の可能性が大きい大学生の間からは、何年かたったら、海外で働くのも悪くないという声も聞きます。彼らが戻りたいと思ったときに国内に仕事があるようになっていけばよいのですが。